令和２年度学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	アンケート分析等からの分析と課題
1　生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、毅然とした指導で、基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	①　挨拶を含めた所作の指導を、ＳＴ・授業・休み時間をはじめ、年間5回程度の「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で指導する。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が、 A　90%以上 B　85%以上90%未満 C　80%以上85%未満 D　80%未満	90.1% A判定	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で90.1%となっており、前年度同期と比較して5.7%増加した。（全体：R1：84.4%→R2：90.1%）学年別で前年との比較は、1年：81.4%→86.2%、2年：86.0%→90.2%、3年：86.4%→94.9%となっており、全学年で積極的に挨拶する生徒の割合が増加している。 今後も職員の率先垂範はもとより、年5回実施予定の「遅刻ゼロ・挨拶運動」を特活課・学年・生徒指導課が連携して取り組み、積極的な挨拶を学校全体へ浸透させていく。
	②　望ましい服装容儀や規範意識の向上に対して全教職員が授業や学校生活全般、年間5回程度の「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で積極的に指導にあたる。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	96.8% A判定	挨拶、服装容儀で積極的に声かけを行っている教員が96.8%であり、前年度同期の90.6%と比較して6.2ﾎﾟｲﾝﾄ、前期の94.5%と比較して2.3ﾎﾟｲﾝﾄ増加した。 基本的な生活習慣の定着は重要であり、今後も生徒チェック用紙の活用により、生徒の実態把握に努め、教職員共通理解のもときめ細かな指導を行っていく。
	③　規則正しい生活習慣と時間を守らせることを指導することで、遅刻の減少に努める。特に朝の始業５分前に着席するよう強く指導する。	1年あたりの遅刻人数が、 A　20%以上減少した。 B　15%以上減少した。 C　15%未満の減少であった。 D　減少しなかった。	＋30.3% D判定	前年度同期と比較して学校・授業間遅刻ともに全体で30.3%増加している。（学校：R1：354→387、授業間：R1：134→249）遅刻が常習化している生徒に対する継続的な指導が必要である。（遅刻3回以上58名、6回以上29名） 今後も学年・生徒指導・家庭が連携し、遅刻回数や家庭状況を踏まえた段階的な指導を行う等、実態に即した粘り強い指導を行う。
	④　「生徒チェック用紙」を活用し、全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	84.0% D判定	アンケート調査の結果、いじめがなく安心できる学校であると感じている生徒は、全体で84.0%となっている。また、6月以降にいじめに関するアンケート調査を７回実施し、相談に対処している。スマホの使用時間が長くなると、ＳＮＳ上の書込みや自分本位のコミュニケーションが原因のトラブル等が多くなる可能性が高い。 今後も、毎週開催されるいじめ対策委員会や年7回実施予定のいじめアンケート等できめ細かな状況把握に努め、早期発見・早期対応を旨とした指導を行い、いじめの根絶に向けて学校全体で臨む体制を推し進めていく。
	⑤　ゴミの分別も含め、校内の環境美化に積極的に努め、教室以外のトイレや更衣室等共有スペースの環境美化も取り組むよう指導する。	教室以外の環境美化にも積極的に取り組んでいる生徒の割合が、 A　85%以上 B　80%以上85%未満 C　75%以上80%未満 D　75%未満	78.1 % C判定	教室以外の環境美化に積極的に取り組んでいる生徒の数値は今年度前期より4.7ﾎﾟｲﾝﾄ下げ78.1%となった。ゴミの分別や教室の整理整頓、清掃項目は、前年度同期よりそれぞれ3.5ﾎﾟｲﾝﾄ増の96.2%と3.8ﾎﾟｲﾝﾄ増の84.5%と数値をあげた。 課題となっていた環境美化意識については、教室内では増加したものの、教室以外の共有スペースでは低調であるため、引き続き美化意識の高揚に向けた指導を推し進めていく必要がある。具体的には遅刻ゼロ・挨拶運動等とタイアップし環境美化週間を年に５～６回設定して、その時季にできる校舎外や校舎内の環境美化に努める。

学校関係者評価委員会の評価	部活動をはじめ生徒たちの挨拶はとても良い。さらに大きな声ではっきりとした挨拶ができるよう指導してもらいたい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	部活動やクラス単位で年間5回実施予定の「遅刻ゼロ・挨拶運動」を通して鶴高挨拶を学校全体に浸透させていくとともに、基本的な生活習慣の定着、規範意識の高揚に取り組んでいく。

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	アンケート分析等からの分析と課題
2　生徒が安心して学べる授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）を推進するとともに、家庭学習時間の確保や読書量の増加を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。	①　様々な背景や問題を抱えた生徒を理解するために年5回の面談週間を設け、学年や教育相談委員会で得た情報を、学校外からも助言を得ながら、教科会でも共有し、適切に支援できる能力の向上を目指す。	個々に応じた指導内容や生徒主体の学習活動を取り入れ、生徒の努力を踏まえた成績評価をしている教職員の割合が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	93.3% B判定	授業等を通して生徒の把握ができ、相談室からの生徒状況等の情報の共有を前年度よりも図ることができた。個々の資質・能力に応じたきめ細かな指導を充実させるために、ICT等をより効率的、効果的に活用した指導の充実に努めていく必要がある。来年度は、特に気になる生徒の情報を1学期中間考査後に担任・教育相談から挙げてもらい1学期より情報の共有を図っていく。
	②　教科でテーマを決め、また、定期的な「ちょっと見週間」を活用し、生徒が主体的に参加するための授業力の向上を図る。少人数であることを活かし、ＩＣＴ機器による発表等、効果的な授業を行う。	授業で充実した学習活動の時間を持つことができると答えた生徒の割合が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　85%以上90%未満 D　85%未満	91.8 % B判定	休校期間中において、自宅学習の難しさを感じるとともに、改めて授業を級友らとともに学べる日常のありがたさを知る機会となったことで、例年より高い評価になったと考えられる。 しかしながら、前期よりやや減少しており、2学期に授業の進度や難易度が上がったときに、いかに達成感を持たせるかが課題である。「話し合い活動」などを行い生徒の授業への主体的な参加や、「ちょっと見週間」等を生かし、教員間での情報交換の場を増やし、来年度は、教科会でスモールステップを意識するなど、達成感を持たせる工夫を協議していく。
	③　個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自尊感情を育み、希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A　5名以上 B　4名 C　3名 D　2名以下	0名 D判定	次年度は、国公立大学志望者の動機付けのために2・3年生を対象とした国公立大学受験の説明会を4月当初に実施する。保護者に対しても同様の進路説明会、奨学金説明会などを1学期中に実施する。また1・2年生の保護者懇談時にブースを設け、進路相談に応じる。 新大学入試制度の傾向や模試結果の分析、受験対策等について、生徒個々の状況を進路指導課、特進クラス担任、3年学年団が情報交換する場として定期的に進路指導委員会を開催する。 また、2年次から国公立大学へ興味関心を持たせるための出前講座の実施や、オープンキャンパスへの参加を積極的に勧めることで意識啓発を促す。
		3月末の就職状況において、就職希望者の内定率が、 A　100% B　95%以上100%未満 C　90%以上95%未満 D　90%未満	100 % A判定	例年とは異なるスケジュールでの就職活動であったが、大きな混乱もなく、就職希望者46名全員が内定した。次年度は求人件数の減少が予想されるため、求人数確保のための企業への働きかけを強化していく必要がある。 また、支援が必要と思われる生徒の就職希望者が増加し、通常枠で受験しても内定をいただけないケースが増えている。それらの改善のために、受験手段の適正化を本人、保護者と相談し早い段階で行う必要がある。その際には、進路指導課、担任、相談室が早期に情報を掴んで協働し、ハローワークの外部組織等との連携を図ることで適切な対策を立てる。
	④　家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身につけさせることにつなげる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A　60%以上 B　50%以上60%未満 C　40%以上50%未満 D　40%未満	58.8% B判定	前年度より家庭学習の時間を確保している生徒は増加している。休校期間中に家庭学習をする必要性を感じた生徒が前年度よりも増えたためと考えられるが、休校期間がなかった2学期では1学期より評価が下がっており、日常的な家庭学習時間の確保が課題である。 詳細な学習時間調査などで学習内容を把握し、習熟の程度に応じた補充的、発展的な学習課題のみならず、学習意欲を喚起する興味・関心別の学習課題の工夫と改善を図っていくために、来年度はICTの利用などの検討をしていく。
	⑤　学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組ませる。朝学習で読書を取り入れ、本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	図書室での年間貸出冊数が、 A　1,600冊以上 B　1,400冊以上1,600冊未満 C　1,200冊以上1,400冊未満 D　1,200冊未満	12月末現在で 1,250冊 C判定	休校期間中の読書の推奨や、朝学習での朝読書、図書委員会のイベント等を行い、貸出数が増加した。本に触れる機会を増加するためにも次年度も継続すべきである。 また、一部生徒への貸出に偏っている傾向があるので、多くの生徒が本に触れる機会を増やすために、国語科を中核として他教科との連携を強化するとともに、部活動、小論文指導等の活動単位を増やす等、読書指導の拡充を図っていく。

学校関係者評価委員会の評価	生徒の興味のある授業はいいが、得意でない授業について、体験型や参加型を取り入れることにより興味の向上が図られるのではないか。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	「主体的・対話的で深い学び」を授業に積極的に取り入れるためのICT機器の活用や、グループワーク・ペアワーク等ＡＬの授業スタイルの授業展開により、生徒が主体的・協働的に学習に取り組めるように授業改善に努める。

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	アンケート分析等からの分析と課題
3　教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携したボランティア活動の推進で、地域や保護者から信頼される開かれた学校づくりに努める。	①　ＰＴＡ関連行事の参加人数を増やすための環境を整備することにより、学校が、開かれた学校づくりに取り組んでいると感じる保護者の割合を高める。	学校は、開かれた学校づくりに取り組んでいると感じている保護者が、 A　95%以上 B　90%以上95%未満 C　80%以上90%未満 D　80%未満	96.3% A判定	全体では前年度同期比1.3%増の96.3%と堅調な数値で、学年別の内訳でも高い数値となった。学校メール配信では、クマ出没警戒情報発令、寒波襲来にともなう対応・措置等、生徒の安全確保に関する情報について迅速な配信に努めてきた。 次年度以降も、速やかできめ細かな情報発信を継続するとともに、前期より導入したGoogleフォームによるアンケート調査、各種催事の参加申込み、グッズ販売の予約受付等、学校・家庭との双方向通信の活用を積極的に推し進めるとともに、より広く応用できるよう各分掌と活用方法や導入効果を検証し，運用の充実を図っていく。
	②　中学生やその保護者に本校の教育活動をより理解してもらえるよう、志望者に対して部活動状況を発信する等、ホームページのタイムリーな情報の発信と内容の充実を図る。	ホームページのアクセス数が A　9.6万件以上 B　8.8万件以上9.6万件未満 C　8万件以上8.8万件未満 D　8万件未満	12月末のアクセス数は131,482件。 A判定	9ヶ月間で約13.2万件と、前年度比6割増のアクセス数となった。月別推移では臨時休校中の4・5月、学校再開時の6月が多く、中学生が志望校調べ等を行う10・11月がこれらに次いでいる。更新回数では、１ヶ月あたり平均では1.2回増の39.6回と、各種大会や地域催事等が中止されたにもかかわらず、前年度と同程度の更新数を維持できた。 今後は、部活動顧問のみならず各分掌内で撮影・記事作成の担当係等を選任し役割分担を明確にしたホームページの管理業務を整備するとともに、更新頻度の増加、活動した生徒の言葉を拾い上げ生徒目線のニーズに合った内容の掘り下げを図っていく。
	③　生徒・教職員・保護者が一体となり、手取川歩行や花いっぱい運動等の学校行事を通して、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み、地域とのつながりを深めていく。	地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員・保護者の割合が、 A　80%以上 B　70%以上80%未満 C　60%以上70%未満 D　60%未満	56.7% D判定	7月アンケート（55.5%）から1.2%微増の56.7%となった。 夏休み以降、白山青年の家ボランティアや舟岡山清掃活動、各部活動による地域交流などの活動が実施されたが、感染症予防のための参加人数の制限により、多くの方への参加を依頼することができずこのような結果となった。 次年度以降も感染症予防に努めながらの活動となるため、実施方法や内容について検討し、多くの生徒・保護者・教職員が関わることのできるように工夫した活動としたい。また、運動部中心に実施していたエリアクリーン活動を文化部・同好会も対象として行い、地域の清掃活動を推進していく。
4　教職員自ら、これまでの働き方を見直し、限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	①　各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに、勤務時間記録表の結果について聴取・助言等を行い、超過勤務時間の縮減に努める。	超過勤務時間を昨年度より減少させることができた (ア)よくあてはまる　(イ)ほぼあてはまる (ウ)あまりあてはまらない　(エ)あてはまらない (ア)＋(イ)の割合が、 A　90%以上 B　80%以上90%未満 C　70%以上80%未満 D　70%未満	83.9% B判定	職員の超過勤務縮減に向けた3年目の取組となるが、1年目は93.6%、2年目は86.7%、3年目の今年度は83.9%（前期評価は66.7%）の結果であった。1年を振り返ると、1・2学期のスタート当初と総体、新人戦に向かう時期は多忙で超過勤務傾向にあるが、11・12月における80時間超過の職員はゼロが示すように、休めそうな時期には休める傾向ができつつある。次年度は、毎月2回の定時退校日の設定に工夫をこらし、計画的な業務遂行意識を啓発していく。
	②　部活動において、顧問と生徒が部ミーティングを通して共通の目標を持ち、活動計画の中で技能向上を目指して効率的・効果的な活動に取り組む。	目的意識を持ち、効率的・効果的な活動に取り組んでいる教職員、生徒の割合が、 A　80%以上 B　70%以上80%未満 C　60%以上70%未満 D　60%未満	教職員 93.5% A判定 生徒 96.2% A判定	コロナ禍で部活動に制限がある状況に加え、2学期末の熊出没により活動時間は大幅に短縮された現状があった。その中で各部がミーティング等を通して目標設定を明確にしたことにより、必然的に量より質を意識し、顧問・生徒ともに納得のいく取り組みができたようである。次年度は、最低限週1回のミーティングを持ち、目標や計画、活動方針等についての共通理解を図り、さらに効率的・効果的な活動を目指していく。

学校関係者評価委員会の評価	開かれた学校を目指し様々な情報を発信しているが、鶴来高校の魅力について中学生に届けられるような発信の工夫が必要である。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	ホームページの更新や学校内の情報発信について、情報課の設置や新聞委員会の活性化など生徒目線での情報発信について検討するとともに、グーグルフォームやメール配信により必要な情報をタイムリーに発信していく。